

JAえちご中越 さんとう地域「ゆきん子舞」栽培暦

月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

日

510152025

510152025

510152025

510152025

510152025

510152025

出穂前後日数

品種特性に合わせた
作業計画の策定

種子消毒
(温湯消毒)

浸種開始

催芽

播種

【作業目安】

4月3日

4月13日

4月15日

播種量の目安: 140g/箱

育苗日数は
20日程度

田植え
5月5日~

中干し開始
6月5日~

最高分けつ期
6月25日

1回目穂肥
7月2日

2回目穂肥
7月11日

出穂期
7月25日

収穫期
9月1日~

生育ステージ

《稚苗の規格》

草丈	12.0cm
葉齢	2.0~2.3葉
第1葉鞘長	3.0~3.5cm
緑化終了時の 苗丈めやす	3.0~3.5cm

60本

12cm

30cm

380本

630本

580本

500本

85cm

470本

穂長 85cm

m²穂数 470本

葉色

37.0~41.0

65cm

80cm

37.0~39.0

36.0~38.0

36.0~38.0

全ほ場で溝切り

的確な生育診断による適切な穂肥施用

病害虫防除対策の徹底 (いもち病・紋枯病・カメムシ)

気象予報と出穂以降の積算温度
にもとづく「刈取計画の策定」

病害虫防除

【いもち病予防】
ルーチンブライト箱粒剤
播種時~移植当日

除草剤散布

“補植苗”を
早期に撤去する

6月中旬~
葉いもち病
早期発見
早期防除

【紋枯病】
パリタシン剤 (収穫14日前まで)
穂ばらみ期~出穂期

【カメムシ防除】
スタークル剤
穂ぞろい期

水管理

・田植後→3~4cmのやや深水で植え傷み回避
・活着後→2~3cmのやや浅水で早期分けつ促進
・除草剤散布時→湛水状態(水深5~6cm)で散布
・中干し開始まで→浅水更新でフキの発生防止

やや深水

一時湛水

浅水更新

生育量を把握して遅れずに!!
小ヒビが入る程度になったら終了

中干し・溝切り

飽水管理の継続 ⇄ タメ水厳禁
(異常高温時には一時湛水)

フェーンの発生時: 地域の水利条件等に応じた
夜間水温を下げるこまめな水管理の徹底

落水期

出穂後25日以降に
最終かん水を実施!!

栽培管理のポイント

Point 1

~適正な作業計画の策定により
健苗を育成します~

① 適期播種、適正な播種量、育苗期
間20日程度で健苗を育成

② 土壌診断結果にもとづく土づく
り資材(有機質・ケイ酸)の施用

③ 作土深15cmの確保~ほ場条件に
応じた適正量の基肥施肥→基肥N
施肥量のめやす: 「10a当たり
7kg」→極端な多肥栽培は避ける

Point 2

~適期田植えて
初期生育を確保します~

① 移植前追肥(べんとう肥)の施用
→活着・初期生育を促進

② 田植期のめやすは5月5日
・栽植密度: 60株/坪
・植付本数: 3~4本/株
・植付深さ: 2~3cmの浅植え

③ いもち病の発生しやすい地域・ほ
場では予防防除(箱施用剤)を徹
底→補植苗を速やかに撤去

Point 3

~生育状況にあわせた生育調節で
過剰生育を抑制します~

① 目標穂数の80%(380本/m²
=1株あたり21本)を確保して
から→適期中干し開始

② 全ほ場で溝切り(10条: 3mに1本)
→速やかなかん水・排水管理

③ 本格的な梅雨入り前にしっかり地
固め→中干しは小ヒビが入る程
度になったら終了~遅くとも出穂30
日前までに飽水管理へ移行

Point 4

~病害虫防除と水管理の徹底で
稲体機能を維持します~

① いもち病・紋枯病の早期発見~
早期防除(こまめにほ場巡回)

② 中干し以降は、田面が強く乾く
ことのないよう飽水管理を継続
(強い中干し・タメ水→厳禁)

③ 出穂後25日以降に最終かん水
を入水(落水は出穂28日以降)
~異常高温時には、速やかに一
時湛水~高温障害を防止

Point 5

~適切な生育診断による穂肥施用
→品質・収量を確保します~

① 穂肥は出穂25~23日前(幼穂形
成期ころ)と14日前の2回に分け
て施用→施肥量は①回目N: 3.0
~4.0kg、②回目N: 2.0~3.0kg、
合計 5.0~7.0kg/10aを目安
とする

② 2回目の穂肥は確実に施用する

③ 急激な葉色低下(SPAD36以下)が
みられた場合は追加穂肥を施肥

Point 6

~適期刈取、適切な作業により
高品質米に仕上げます~

① 出穂後の積算気温: 975℃を参考に
籾の黄化率(90%)を確認して適
期に収穫する→異常高温が予想さ
れる場合には早めに収穫

② 胴割粒の発生防止: 刈遅れに注意
~籾水分の確認による適正な乾燥
温度・速度で急激に乾燥させない

③ 収穫後は早めに土づくり資材の投
入+稲わらの秋すき込み

《施肥のめやす》

(成分 kg/10a)

区分	時期	N成分	備考
土づくり	収穫後	—	稲わら秋すき込み 有機質・けい酸質資材
基肥	~田植え	5.0~7.0	地力に応じて
穂肥1	出穂25~23日前	3.0~4.0	遅れずに施肥~籾数確保
穂肥2	出穂14日前	2.0~3.0	しっかり施肥~登熟向上
合計	—	10.0~14.0	*一発基肥 トータルN: 10.5~13.5kg

《生育のめやす》

生育ステージ	時期	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉色 (SPAD)
1回目穂肥	7/2	65	580	37~39
2回目穂肥	7/11	80	500	36~38
出穂期	7/25	85 (穂長)	470 (穂数)	

《品質向上・収量確保目標》

玄米1等級比率	90%以上
10a当たり収量	720kg

《品種特性》

早晩生	耐倒伏性	刈もち	穂もち	紋枯病
早生	強	中	中	中

《収量構成要素》

収量 (kg/10a)	1穂籾数 (粒)	穂数 (本/m ²)	m ² 籾数 (百粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)
720	77	470	360	88%	23.0